

## まえがき

『東京芸術大学百年史』の『演奏会篇第二巻』を刊行する運びとなった。『演奏会篇』は本来全二巻を予定していたが、調査が進むにつれて貴重な資料の分量が当初の予想をはるかに超えたため、全三巻に変更することとした。したがって『東京芸術大学百年史』の音楽篇は、『東京音楽学校篇第一巻』（既刊）、『同第二巻』『東京芸術大学音楽学部篇』『演奏会篇第一巻』（既刊）、『同第二巻』『同第三巻』の六分冊から構成される。

このたび刊行の『演奏会篇第二巻』は、明治二十一年から大正十五年までの演奏会を取り上げた『同第一巻』につづいて、昭和二年から昭和二十七年まで、すなわち東京音楽学校の改廃（東京芸術大学の発足は昭和二十四年五月）までを扱い、昭和二年～十二年の第一章と昭和十三年～二十七年の第二章に分けた。内容は従来の編集方針に従って東京音楽学校が主催した卒業演奏会、定期演奏会、特別演奏会、出張演奏会、学友会および同声会の演奏会のプログラムを中心とし、当時の解説や新聞・雑誌の批評や関連記事をそれに加えた。人名や曲名の表記は原則として当時のままとし、編集者による解説は最小にとどめた。さらに補遺として昭和の東京音楽学校演奏会一覧を添え、巻末に作曲者と演奏者の人名索引を付した。昭和二十四年以降の東京芸術大学音楽学部時代については、引き続き刊行予定の『演奏会篇第三巻』に譲る。

本巻が取り扱う時代は、わが国の洋楽界が欧米の模倣から脱して独自の歩みを開始した時代である。東京音楽学校の定期演奏会は昭和四年に会場を上野の奏楽堂から日比谷公会堂に移し、その内容もますます充実していった。特に昭和六年から昭和十二年までは、グスタフ・マーラー門下の著名な作曲家・指揮者のクラウス・プリングスハイム氏が東京音楽学校に在職し、同校の演奏会でマーラー、ブルックナー、ベルリオーズ、ストラヴィンスキー、リヒャルト・シュトラウスなどの斬新な作品を本邦初演し、日本の音楽界に絶大な刺激を与えた。また声楽のネットケ・レーヴェ、リア・フォン・ヘッセルト、

ピアノのレオ・シロタ、レオニード・クロイツァー、指揮のヘルムート・フェルマーなどの名教師が教鞭を取り、学生の中からも、その後の音楽界で指導的な役割を果たす数々の人材が巣立っていった。

しかしこの時代はまた、満州事変から日中戦争、太平洋戦争へとつづく激動の時代、そして戦後の混乱と窮乏の時代でもあり、東京音楽学校の演奏活動にも暗い影を投げかけた。プリングスハイムは昭和十二年、ベートーヴェンの第九交響曲による告別演奏会を最後に政治的な理由から日本を去り、東京音楽学校の定期演奏会も昭和十八年十二月、第一〇一回をもって中断する。その会が軍用機献納披露を兼ね、モーツァルトやベルリオーズの前に君が代、海行かば、海軍航空の歌、学徒進軍の歌、愛国行進曲が演奏されたことを知れば、音楽の学舎も社会の動向から自由ではありえなかったことがわかる。上野の杜に再び歌声が蘇ったのは、昭和二十一年の秋であった。

本巻の作成にあたっても多くの方々から御協力をいただいた。まず、出版を引き受け、予定の変更にも快く応じて下さった音楽之友社社長浅香淳氏と制作部長中山正吾氏、制作の実務を担当された全集編集室課長林靖章氏、出版局制作部清野陽子氏に厚く御礼申し上げる。

また、『演奏会篇第一巻』の編集委員代表を務められた元教授大石清氏をはじめ、本学の元職員や卒業生から数々の貴重な御教示をいただいた。心から感謝したい。

最後に、音楽学部卒業生の高原聰子、山本百合子、畠山美佳子、太田暁子、前原恵美の諸氏が資料の調査・整理に尽力されたことも記して謝意を表する。

平成五年一月

角 倉 一 朗  
山 本 文 茂  
船 山 隆

橋 大 佐  
本 貫 野  
久 紀  
美 子 靖  
子 靖